学校法人コミュニケーションアート　東京デザインテクノロジーセンター専門学校　学校関係者評価委員会　会議資料

令和7年度自己点検・評価表（令和7年4月1日～令和8年3月31日）による

大項目	点検・評価項目	評　価 優れている…3 適切…2 改善が必要…1	点検・評価項目総括	特記事項（特徴・特色・特殊な事情等）	学校関係者評価委員の御意見
1　教育理念・目的・育成人材像	1-1 理念・目的・育成人材像は定められているか	3	学校法人コミュニケーションアート　東京デザインテクノロジーセンター専門学校（TECH.C.）は、滋慶学園グループに属し、「職業人教育を通して社会に貢献する」ことをミッション（使命）としている。	・滋慶学園グループの理念、コンセプトは学校に関わるスタッフ全員に浸透しており学校運営にあたっている。 ・企業プロジェクトでプロの仕事と同じプロセスを経験し、仕事を実践する力を身に付ける様に努力している。また課題を解決するためのアイデア、コンセプト立案、クリエイティビティ、プレゼンテーションを行い実践的な創造力を身に付ける過程を学生は学んでいる。	・TECH.C.では、単に技術を身につけるだけでは将来通用しないという危機意識を前提に、AI時代においても「使われる側」ではなく「使う側」として社会に出る人材の育成を目指している。そのため、生成AIを使いこなす力と、課題の本質を見極める思考力を重視している。これらを踏まえ、「創造性」「イノベーション」「リーダーシップ」の3つのDiplomaを通じて、未来社会に必要な人材像を明確に描いている。 ・学校側の理念・育成が実践されている。 ・AI時代にシフトしていく中で、情報を使う側になれるのか、それを教えきれるのかがホームページに書かれていない。学校の立場としては、人間が出来ていればリテラシーを守って正しく使うことが出来ると思うので、人間を作るということが重要と考える。
	1-2 学校の特色は何か	3	「3つの教育理念」（「実学教育」「人間教育」「国際教育」）を実践し「4つの信頼」（①学生・保護者からの信頼 ②高等学校からの信頼 ③業界からの信頼 ④地域からの信頼）を得られる学校を目指している。	・産学連携教育の核となる企業プロジェクトは38タイトルを実施した。課題提供企業としてマイクロソフト、データブリックス、フォーティネット、AWSなどの大手グローバル企業に協力を得ることが出来た。また、SAF燃料を周知するための体感ゲーム制作のプロジェクトでは、制作したゲームが大阪・関西万博に展示され、約3,000名の子どもたちに遊んでいただいた。 ・1年間で30タイトルに取り組むことを目標としているが、それ以上に取り組むことができた。企業から高い評価を得たものなど、例年以上の成果が得られている。優秀な学生作品については卒業進級制作展で表彰している。	・さらなる企業プロジェクトの拡充に期待します。 ・TECH.C.の大きな特色は、企業との連携によるプロジェクト型学習にある。特に生成AIを活用したアプリケーション開発の実績があり、Microsoft社との事例をはじめとするプロジェクトを通して、学生が実社会での即戦力としての経験を積める仕組みが整っている。AIやデジタルに対応できる力を実装レベルで身につける教育が行われている点が特徴的である。 ・企業プロジェクトにおける責任感の学習・育成は、十分な勉強になっていると思われる。
	1-3 学校の将来構想を抱いているか	3	プロとして必要な知識力・技術力と合わせ、ホスピタリティマインド、コミュニケーション力、チームワークなどこれからの業界に求められる人材を育成し輩出している。 また、“TECH.C.はテクノロジーを使って、「創造力」を仕事にする学校”として、多くの人々に喜んでもらえる、感動してもらえるモノづくりができる人材の育成を実践している。	・2025年度に設置した高等課程は2年目を迎え、初年度は5名の入学だったが、2年目は45名にご入学いただいた。設置コースは、コミックイラスト、VTuber、ゲームクリエイター、動画クリエイター、ITホワイトハッカーの5つ。特にコミックイラストの人気が高く、20名が入学している。TECH.C.高等課程のコンセプトとして、「好きなことなら熱中して頑張れる」「夢に向かって進みたい」「自分らしさを発揮したい」という想いを持って3年間を過ごし、好きなことを学びを通して成長して欲しいと考えている。 ・専門課程では、各分野でプロジェクト授業を設け、クラスや学年を超えてチームを編成し、より実践的な企業プロジェクト作品の制作、売れるデザインを学ぶためイベントでのブース出展などを行った。課題制作を通してコミュニケーション力、チームワーク、リーダーシップなど、社会人に必要な共創する力を身に付けている。	・高等課程は単位制、定時制へのニーズが年々増しており、全国的に対応型の公立高校の創設が増えていると新聞ニュースで拝見します。課題は単位評価制度にあり、個別対応教育が優れている滋慶学園において新たな単位評価基準を設けられれば、不登校生のみならず海外留学など目標を持った多くの学生からのニーズに応えられるのではないでしょうか。 ・現在の1年生が卒業する数年後には、さらに進んだAIシフトが社会に起こることを見据え、そうした未来に対応できる人材を育てる長期的な構想がある。企業プロジェクトとDiploma教育を軸に、変化に強い人材を送り出す体制を整えており、今後はTECH.CとしてのAI policyの明文化・情報公開を進めることで、教育姿勢やビジョンをより社会に示していくことが期待される。 ・高等課程の設立は意義があると思う。ただ対応される先生方の負担が大きくなることへの配慮も必要。
2　学校運営	2-1 運営方針は定められているか	3	運営方針は滋慶学園グループの示す、毎年の長期・中期・短期展望を基に、事業計画を毎年作成している。	・事業計画は、法人常務理事会、法人理事会の決済を受け、承認を得ている。	・運営方針は明確に定められており、現場ではそれに基づいた取り組みが行われている。加えて、学生や教職員の声に応じた柔軟な対応も意識されており、今後さらに発展していくことが期待される。
	2-2 事業計画は定められているか	3	事業計画においては、グループ全体の方針や方向性、組織、各部署における目標や取り組み、職務分掌、各種会議及び研修等々について明確に明記されている。 運営組織は、事業計画の核をなす組織目的、運営方針、実行方針と実行計画に基づいたものである。単年度の運営も、中期計画の視点に立って行っている。	・事業計画書は、広報・教務・就職・総務と、学校におけるすべての部署について考えられ、すべての部署が同じ方針・考え方を理解するように努めている。 また教室機材や環境は、業界の動向に合わせて授業講師や各企業に相談のうえ導入を検討している。	・事業計画はしっかりと策定されており、その実行に向けて取り組みが行われている。特に学生数の増加にも対応しようとする努力が見られ、今後の見直しや調整によってさらに効果的な計画となる可能性が高い。
	2-3 運営組織や意思決定機能は、効率的なものになっているか	3	事業計画書の組織図には学校に係わる人材が明記され、誰もが全員の組織上の位置づけを理解できるようになっている。	・学校全体の運営、あるいは各部署の運営が正しく行われるために、組織図、校務分掌、意思決定が明確になっており、各会議を通じて効率的に責任者の決裁を得るように務めている。	・縦と横の関係性を明示していただくことを希望します。 ・講師採用について、各学科の責任者が面接を行い、そのあと上長の判断を経て講師採用に至るというプロセスが説明されており、一定の組織的な判断機構が機能している様子がうかがえます。
	2-4 人事や賃金での処遇に関する制度は整備されているか	3	滋慶学園グループが定める人事制度により処遇されている。	最先端の仕事に携わっている方を非常勤講師として採用し、充実した教育が実現している。今年度は約180名の企業の方に講師に就任していただき、学生指導に当たっていただいき十分な教育が実現できている。	・企業とタイアップ(講師派遣)することで、相手から新しい技術を教えてもらえる流れが出来ている。
	2-5 意思決定システムは確立されているか	3	意思決定システムは内容により会議等のプロセス、そこにおける決裁者、最終決裁者も事業計画に明記し、確立されている。	定期的なミーティング、会議、教育部会、各種委員会などを的確に実施している。	・各学科責任者による決定と、最終的に責任者との合意をもって本決定に至る流れが示されており、ある程度の意思決定システムが確立されていることがうかがえます。

	2-6 情報システム化等による業務の効率化が図られているか	3	滋慶学園グループではDX委員を各校より選出し、定期的なミーティングを実施しており、デジタルトランスフォーメーションを駆使して業務の効率化を図っている。	・教育ダッシュボードという学生管理システムで、学生個人の面談記録、個人情報、出席状況、成績などを一元管理し、スタッフで情報共有できるようになっている。傾向や対策などを学園グループのデータベースをもとに分析し、学生対応を向上させる仕組みもある。	・担任制がとても評価できる。学生へのフォローが適切。 ・見える化が出来ている反面、プライバシー保護の取り組みも必要と考える。
3 教育活動	3-1 各学科の教育目標、育成人材像は、その学科に対応する業界の人材ニーズに向けて正しく方向付けられているか	3	職業人教育は常に業界と密接な関連を持たなければ、教育目標、教育する人材像は正しく方向づけられないと考えており、業界の動向を常にキャッチし、その変化に対応して養成目的や教育目標の見直しを毎年実施している。	・専攻のカリキュラムは、滋慶学園COMグループの全国姉妹校と教育部会を設け協議している。また、協力していただいている企業や、授業を担当している講師にもヒアリングし授業に落とし込んでいる。 ・AIの利活用については、目指す業界によって扱いが異なってくるため慎重に対応しており、滋慶学園グループの方針を念頭に置いたうえで、業界に合わせた利活用ができるように指導している。	・各学科においては、教育目標や育成人材像の見直しが定期的に行われており、業界動向への対応姿勢が見られる。ただし、AIなど急速に変化する分野に関しては、対応状況が不透明であり、十分に全学科に波及しているとは言いがたい。 ・映像・イラスト分野を含む複数の領域では、すでに学生によるAI活用が進んでおり、業界においてもAIスキルを有する若手人材へのニーズが顕著になっている。このような背景から、カリキュラムの一層のアップデートが求められるとともに、講師陣自身のリスキリングやアップデートも重要視されている。 ・「講師から意見を参考に」とあるが、講師側が十分にアップデートされているかの検証がなされていない。
	3-2 修業年限に対応した教育到達レベルは明確にされているか	3	「学生便覧」に「学年/学期到達目標」を記載し、各専攻ごとに4年制は8セメスター、3年制は6セメスターに分類し、教育到達レベルを明確化している。	建学の理念である「国際教育」を実践する一つとして英語授業を開講している。4年制クラスは必修に3年制クラスは選択としているが、1年生の多くが履修しておりレベル別に8クラスに分かれて授業を実施している。学生便覧の到達目標をもとに授業の計画を立てているが、一人ひとりのスキル、意欲などが異なる場合が多いため、本校独自の教育システム「ダブルメジャー」を利用して、一人ひとり面談のうえで履修する科目を決めている。	・学年ごとの成長は確認できるが、特に1年次の日本語力や課題理解に課題がある。明確な到達基準や可視化は今後の整備が必要。 ・留学生の日本語能力はどうか。厳しい学生もいる。 ・学生一人ひとりへの対応は重要であるが、効率的なやり方が出来ていると期待している。 ・各学生の上げたいスキルに合わせて、授業を履修できる。留学生の日本語対策が必要。
	3-3 カリキュラムは体系的に編成されているか	3	教育目標達成のためのカリキュラムは、入学から卒業まで、体系的に編成されているが、全国の姉妹校が集まる教育部会等で業界の情報を集約し研究、見直し等を行っている。	・本校の教育の柱である「産学連携教育」により、社会人として必要な実践力、技術・知識、ビジネスマインド等を身につけている。産学連携の柱となる「企業プロジェクト」では、商品化を前提としたプロジェクトに取り組み、企業における実践的な仕事を身につける。 ・教科書については、Tech+ CertMaster Study Japanese V6をIT系クラス1年生は全員が購入し受講する体制にしている。	・カリキュラムに関しては、学生が互いの成果を見て学び合うことを通じて成長を促す構造が確認されており、プロセス重視の姿勢が浸透している。AIやプログラミングに関しても、特定の授業において体系的な導入が図られており、ITやゲーム制作分野では講師による海外企業との連携を通じた教育プログラムも実施されている。また、AIに関する基礎概念や活用方法を段階的に学べるよう、教育内容の構造化が進められており、一定の体系性が確保されていると評価できる。 ・Cloud＋の授業において学生が教材を購入していない事実が判明しました。教材を購入しない理由は学生の判断であるのであれば仕方ないのかもしれませんが、予習、復習をさせること自体を年頭においていない運用については疑問を抱いています。次回の委員会において議論させていただければと存じます。 ・企業プロジェクトが1年生の5月から始まっており、大学よりも圧倒的に早いので、自己成長が早い。
	3-4 学科の各科目は、カリキュラムの中で適正な位置付けをされているか	3	毎年、教員で見直しを行っており、適正な位置づけを行っている。	4つのワールドそれぞれにチームで制作する授業やゼミ、課題制作のチャンスを1年次から用意することで、早い時期からチームで考え協働し成果を出すプロセスを習得できる。その先に企業プロジェクトでより実践的な課題制作に取り組むことで職業人を育成している。	・各科目においては、AIの使用可否が明確にされている場合もあり、特にゲーム制作系では「AI利用の禁止」を掲げながらも、学生にあえて使わせ、行き詰まりから問題解決力を養うという教育的配慮がなされている。 ・カリキュラムの中で各科目が教育的な意図を持って位置付けられており、AIを取り巻く現実的な使用環境を想定した教育設計が一部で実践されていることが確認できる。
	3-5 キャリア教育の視点に立ったカリキュラムや教育方法などが実施されているか	3	カリキュラムは学科に関わるもののみならず、社会的・職業的自立を目指し、業界・企業の協力を得て「キャリア教育」の視点に立ったものになっている。	キャリア教育の視点に立って、1年次にはHRでホスピタリティやコミュニケーションについて理解し、卒業前年度からはキャリアセンタースタッフから社会人として必要なルールやマナーについて学ぶ授業を実施している。また就職出陣式や企業説明会、作品審査会、卒業進級制作展、インターンシップなど、企業の方々に学生をご覧いただく就職に直結した機会を多くすることで、キャリア形成を行っている。	・AIの活用には倫理や目的意識を重視し、生成物の責任も含めて指導。ガイドライン整備や企業ニーズへの対応も進んでおり、キャリア支援が実践的に行われている。 ・就活時期の早期化に合わせ、学校での対策も早める必要がある。 ・就職出陣式について4月に実施してほしいという声がある。（サマーインターンが4月末に締め切るところもあるため。）
	3-6 授業評価の実施・評価体制はあるか	3	1年に2回（前期末、後期末）に学生に授業アンケートを実施し、その内容を把握し教員で全体評価を行っている。	・授業アンケートは前期と後期の終了後に実施。内容は滋慶学園グループ統一のものであり、授業の内容、指導態度、人間教育（挨拶や掃除）、先生の言動、学習効果などの項目がある。また自由記述もあるが、学生で記述までしてくれるものは少なかった。 ・授業アンケートの結果は講師へフィードバックして授業の改善に役立ててもらっている。	・授業アンケートのフィードバックが開示されていない。授業連携を行う上でも、すべての講師に対する評価は開示されるべき。 ・学生アンケートを活用した授業評価が定着しており、結果が数値化・比較可能な形で整理されている。自由記述の内容も講師へフィードバックされており、改善への意識が高い。極端な不満が続く場合の対応も含め、継続的なチェック体制が構築されている点は評価できる。
	3-7 育成目標に向け授業を行うことができる要件を備えた教員を確保しているか	3	講師契約は一年毎の更新としている。業界の変化に合わせて授業内容を変更した際は、対応できる講師を採用し授業を行っている。	・新しく講師を採用するために、業界関係者、企業に協力を要請し人材確保に力を入れている。 ・専攻別の入学者数も年々変化してきており、イラスト、映像関係が人気で増えているため、講師の確保に努めている。	研修制度が整備されており、年次に応じた内容が指定されていることで、一定水準の教育力を備えた講師が計画的に育成されている。育成目標に対する組織的な取り組みが確認でき、教員の質を担保する仕組みが運用されていると判断できる。
	3-8 教員の専門性を向上させる研修を行っているか	3	全体講師会、専門分野のみの分野別講師会などをそれぞれ年2回程度実施している。また授業後には教員と講師の打ち合わせや授業報告書の提出をお願いしており、コミュニケーションの強化に努めている。	・年に2回開催する全体講師会では、学園の理念やコンセプト、また学生対応のルールなど、すべての講師にご理解いただいたうえで教壇に立っていただくための内容で実施している。 ・各分野単位で行う講師分科会では、授業改善や情報共有等を目的とし、学生の詳細な情報共有や、各授業内容の擦り合わせと確認、業界の動向に関して授業内容についての議論を重ねている。 ・年度当初の全体講師会でシラバスの重要性について学校長より改めて説明し、シラバスの考え方と記入方法について講師と共有した。講師の先生方も記載が詳細になり、授業内容を見直す機会となったことが伺えた。	・講師向けの研修会が必要に思う。専攻ごとの講師分科会を発展させて、技術勉強会や教育方法の研修会の開催を希望する。 ・教員に対し、指導法を中心としたグループワークや討論形式の研修が実施されており、実践的な内容で構成されている。講師にも必要に応じた研修が求められており、専門性向上に向けた体制が継続的に整備されているといえる。 ・シラバスはWindowsとMacでフォントやレイアウトが違う。 ・セキュリティ、プライバシー、倫理、リスク対策、健康管理、環境などの研修が出来ているか。 ・シラバスについて、高校生が受験の時に見るのに見にくさがあったよう。

	3-9 成績評価・単位認定の基準は明確になっているか	3	成績評価は出席率、授業態度、作品及びレポート、小テストなどで決定している。	・出席率が66.7%以上をクリアし、成績評価が60点以上で合格となり単位認定される。A-Fの5段階評価となっている。 ・年度当初の全体講師会で成績評価のスタンダードを提示し、評価基準のバラツキが無くなるように共有した。	・成績評価や単位認定に関する明確な基準の提示や運用状況の共有が望まれる。 ・成績評価および単位認定の基準については、シラバスや学生向けのガイドラインなどを通じて明示されており、学生が自身の学修成果を把握しやすい環境が整えられている。また、評価基準の透明性が担保されていることで、教員と学生の間に共通認識が生まれ、公正かつ一貫性のある評価は概ね実施されていると考えられ、高く評価できる。
	3-10 資格取得の指導体制はあるか	3	資格取得を目的とする授業を開講している。	資格取得の一例として、Microsoft Office Specialist Excel83名（合格率79.0%）、PowerPoint 99名（合格率86.8%）、Azure AI Fundamentals 48名（合格率41.0%）が合格し資格取得出来ている。また各種検定（アソシエイト・ホスピタリティコーディネータ202名（合格率100%）取得、コミュニケーションスキルアップ218名（合格率86.2%）なども取得している。	・CompTIAなどの資格取得を見据えた取り組みが進められており、学生の能力向上を後押しする姿勢が見られる。一方で、費用や難易度の面で受験のハードルがあることも共有されており、今後の支援体制の強化が期待される。 ・AIリテラシー検定、英検などを追加することはできないか。 ・早い段階での資格取得は、モチベーションが上がるのでとても良い。
4 教育成果	4-1 就職率(卒業者就職率・求職者就職率・専門就職率)の向上が図られているか	3	就職では、「絶対就職」を標語に掲げ、就職希望者全員が就職達成できるよう一人ひとりにあったサポートを行っている。	合同企業説明会（年2回）、単独の企業説明会（今年度70社）、デザイナー系の学生を対象としポートフォリオをご覧いただく作品審査会（63社117名）、就職活動のキックオフとした就職出陣式などのイベントを開催し、学生が就職活動を意識して卒業までのスケジューリングが出来るようにしている。就職希望者による第一専門職の就職率は90%を超え、多くの学生が自分の希望する業界、身に付けた技術を活かした就職をかなえている。また卒業後の転職についてもサポートしている。	・SPI試験での振るい落としが就職内定を妨げる要因とされ、今年からSPI対策に集中する時間を設けたことは、就職率向上に向けた具体的な対応であり評価できる。また、SPIを「創造力」や「論理的思考力」を育成する機会と捉えることで、就職に必要な能力の底上げにつながっている。 ・アフターケアも手広く行っている。
	4-2 資格取得率の向上が図られているか	3	資格取得に関連する授業はあり、主に下級生が受講しているが、受験率向上が十分ではないため、受験するための動機付けやシステム化が必要である。	在校生全員が必須受験する資格検定については、学園の教育部会などで打ち合わせのうえ、MOS試験、AzureAI、アソシエイト・ホスピタリティコーディネーター、コミュニケーションスキルアップとなっており、それに加えて各学校で判断した資格試験を受験している。	・学生が自宅でも学習を進められるよう、学習ツールの支援体制が整えられており、資格取得に向けた自主的な学びが促進されている。こうした支援の継続・拡充により、今後さらなる資格取得率の向上が期待される。
	4-3 退学率の低減が図られているか	3	精神疾患や経済的困窮など専門家の協力が必要な場合もあるため、ファイナンシャルアドバイザーやカウンセラーに協力を得てサポートしている。	学校全体の退学率は5.4%であった。退学理由の多くはメンタル不調や体調不良などの問題を抱えており、習慣として登校できず通学が困難のため退学となった。	・学生の退学防止に向けて、学習環境の整備だけでなく、メンタル面での支援体制も重要な役割を果たしている。メンタル不調を抱える学生に対する相談支援で、早期対応が可能となってきている。こうした取り組みは、学生が安心して学び続けられる基盤をつくり、退学率の低減に寄与していると評価できる。
	4-4 卒業生・在校生の社会的な活躍及び評価を把握しているか	3	在校生の社会的な活躍および評価は常に把握が可能である。卒業生との交流は卒業時に同窓会組織への参加とSNSの登録を促している。	・在校生のコンテストへの入賞、企業プロジェクトによる商品化は学校全体を通して評価の共有をしており、公式HPへの掲載や他学生の前での表彰などを実施している。卒業生の活躍を収録したものは学園のラジオ番組と公式SNS「あなたの夢は何ですか」で配信されている。 ・TECH.C.のYouTubeチャンネル登録者数は2,270名。最高視聴数は2025年8月に配信したニジサンジのVTuberとコラボしたオープンキャンパスが90,000回視聴されている。公式Xは4,782フォロワー、最高で152万ビュー。	・教育成果を適切に伝える工夫や、学生の成長を支える取り組みを通じて、卒業生・在校生の社会的活躍を後押ししている。今後はその実績を積極的に収集・可視化することで、さらなる信頼性のある評価基盤の構築が期待される。 ・YouTubeチャンネルの登録数はどれくらいか？
	5-1 就職に関する体制は整備されているか	3	就職専門部署であるキャリアセンターを設置し、担任と連携を取りながら対応している。	・キャリアセンターは求人開拓、学生の就職相談、斡旋、履歴書の書き方、面接対応、インターンシップ、業界アルバイト、ポートフォリオ（作品集）指導、転職など卒業後サポートも行っている。 ・留学生の就職は、日本語力の問題でコミュニケーションが不安視され就職が決まらない場合があり、日本語力を向上させるための授業、サポートを強化している。	・留学生の中に一部、日本語によるコミュニケーションに問題のある学生がいる。 ・キャリアセンターが学生の就職活動において重要な役割を果たしている。ポートフォリオの作成や活動時期の指導を通じて、学生の意識を適切な方向へ導いており、就職支援体制は有効に機能している。ただし、近年の採用活動の早期化に対応するため、支援スケジュールのさらなる前倒しが求められている。
	5-2 学生相談に関する体制は整備されているか	3	担任制を取っており、個別に相談時間を設け、学習理解度や職業理解、就職活動、アルバイトや友人関係など学生生活などの不安にも寄り添っている。	担任はホームルームなどでグループワークの実践、友達作り、コミュニケーション力の強化、ホスピタリティマインドを身に付ける講義や演習を実践し、相談をしやすい環境作りやマインドの強化を図っている。	・学校生活やキャリアに関する悩みに対して、教職員が丁寧に対応している様子がうかがえる。学生が自身の課題に早期に気づき、成長につなげるための支援が日常的に行われており、相談体制は一定の効果を上げている。
	5-3 学生の経済的側面に対する支援体制は整備されているか	3	学生の経済的側面については、相談窓口として事務局会計課を置き対応する制度がある。	事務局会計課にはファイナンシャルアドバイザーがおりサポートしている。	・経済的に厳しい学生に対するPC導入サポートが十分でない。滋慶学園グループ内で廃棄するPCを回収管理し、希望する学生へ就学期間中に貸与するシステムを検討してほしい。
5 学生支援	5-4 学生の健康管理を担う組織体制はあるか	3	・健康管理については滋慶学園グループのクリニックである慶生会クリニックが担当し、在学中の健康管理を支援する制度がある。 ・精神的な問題に関してはスチューデントサービスセンターを設置し在学中のメンタルケアを支援する体制を構築している。	・慶生会クリニックの協力のもと学生は年一回の健康診断を実施している。 ・専門のスクールカウンセラーが週5日学校で学生支援を行っており、いつでも相談に乗ってもらえる環境を用意している。	・学習支援や生活環境の整備への取り組みからも、学生に対する包括的なサポート意識がうかがえる。今後、健康管理体制のさらなる明確化と充実が期待される。
	5-5 課外活動に対する支援体制は整備されているか	3	学生の課外活動であるサークル活動・同好会は、校内の施設を使い活動ができるように支援している。	・学生が自発的にサークル活動を行い、好きなことを通して、学年、クラスを超えてコミュニケーションを楽しめるようになった。サークルによっては学園祭などで発表する機会を用意し活動を支援している。	・サークル活動へのバックアップ体制が整っていてありがたい。 ・企業プロジェクトなどの実践的な活動を通じて、学生が技術力や人間関係を広げる機会が提供されている。緊張感のある環境の中で学ぶ体験が、成長に直結していると評価されており、課外活動への支援も行われていることが分かる。
	5-6 学生寮等、学生の生活環境への支援は行われているか	3	学生寮も学園の専用の寮を整備しており、寮長と担任とが連携して学生を支援している。高田馬場周辺の賃貸情報も地域の不動産業者と連携し、提供・サポートしている。	・学生寮はジケイ・スペース株式会社が管理運営しており、連携を取りながら支援している。	・学生生活全般に対する学校の支援姿勢に対し、保護者から高い満足が示されている。進路選択時の丁寧な対応や日々のフォローアップにより、学生が安心して生活し学びに集中できる環境が整っていると考えられる。
	5-7 保護者と適切に連携しているか	3	学生が休むと電話やメールで保護者に連絡をしている。長期で欠席した場合は家庭訪問も行っている。また毎年個別の保護者面談も行っており、学生の情報交換を密に行っている。	・毎日出席チェックを行い、登校していない学生には電話やコミュニケーションツールを使用して連絡を取っている。連絡欠席した学生に関しては、保護者に連絡し状況の共有や家庭での様子の聞き取りを行っている。連絡がつきにくい場合は家庭訪問を行い状況把握に努めている。	・保護者との信頼関係が築かれており、進路選択や学生の成長過程に対しても丁寧な説明と支援がなされている。学校からの情報発信や対話の機会が適切に提供されていることが、保護者の安心感や満足感につながっている。

	5-8 卒業生への支援体制はあるか	3	卒業生に対して再就職や転職サポートを行う体制がある。	・卒業後もキャリアセンターや担任に相談があった際は、在校生と分け隔てなく相談を受けサポートを行っている。	・在学中のキャリア支援や企業連携活動が卒業後にもつながる土台となっており、今後の支援体制拡充が期待される。
6 教育環境	6-1 施設・設備は、教育上の必要性に十分対応できるよう整備されているか	2	・教育環境（施設・設備、機材、ソフトウェア等）の整備は専門のサポート業者に委託し対応している。 ・校舎内を清潔に保つために週一度点検日を設け、不備はないか確認している。	・PCメンテナンス業者が常駐し、機材庫スタッフも設置することで、対応する窓口の準備を進めている。日々変化する業界に対応するため、更新され導入を検討すべきソフトウェアや学生が学びやすい環境を提供するために、もっと対応するスピードを上げる必要がある。 ・新校舎ができ、学生のランチやミーティングのスペース問題は多少緩和された。 ・学校PC貸し出しについては、使用していないPCの貸し出しは相談によっては可能だが、数が限定的であり、また想定されるリスク（セキュリティ、故障時の修理、ウイルス感染など）対応のルール化が必要である。自習ができる環境は空き教室を平日は20:00まで、日曜日祝日は10:00-17:00で開放している。	・空き教室が無いため、学生が自習できない。 ・ノートPCを使う教室での授業は改善が必要。（貸し出しや準備に時間がかかる。）全体としては凄く良くなった。 ・学生数の増加により教室の空きが非常に少なく、自習に必要な環境が不足している。特に自宅学習の代替手段としてのPCの確保が難しい学生に対し、学校側で不要PCのストックや一時貸与の仕組みを整える必要性がある。また、PCの性能自体は向上しており教育には適しているが、貸出返却の手続きが煩雑で、授業時間を圧迫する要因となっている。この点に関しても議論されていると思うが、改善が求められている。現状では「整備は進んでいるが、対応しきれていない部分がある」と評価できる。
	6-2 学外実習、インターンシップ、海外研修等について十分な教育体制を整備しているか	3	・学外実習や特別講義は積極的に取り組んでいる。 ・卒業年度生はインターンシップに参加し就職活動に活かせる制度がある。 ・アメリカで企業訪問や特別講義を受ける海外実学研修の制度がある。	・海外実学研修で講演いただいているアートセンター出身のジム先生による特別講義を実施した。普段の授業では聞けないクリエイターから話を聞く機会となり満足度の高い内容となった。 ・海外実学研修では、ロサンゼルス、サンフランシスコ、シリコンバレー、eスポーツはラスベガスの企業訪問、特別講義、施設見学を実施した。帰国後に5分程度のプレゼン大会を行い、学びの成果を発表し共有している。 ・2026年度はイタリアでの研修、eスポーツはアメリカに加えて韓国研修を実施予定。	・経済的な理由による海外研修に参加できない学生に対するオンラインを用いた特別講演の充実を希望する。 ・インターンシップ実施企業の情報収集、企業との連携つくりにもさらに注力していただきたい。 ・海外実学研修にはプラスしかない。どの学年でも参加する事の意味がある。
	6-3 防災に対する体制は整備されているか	3	・ジケイスペースの協力を得て防災訓練（火災、地震などを想定）を実施している。 ・マニュアルを用意し防災体制を構築している。	・防災訓練を実施し緊急時の避難経路や対応方法の確認を行った。 ・スタッフ向けに警備会社をお呼びし、さすまた訓練とAED使用訓練を実施した。 ・エントランスに警備スタッフを配置し、学生には学生証の着用を義務付けている。 ・ホームルーム内で学生に避難経路の確認や消火器の使用方法などについて説明を行っている。 ・マニュアルは防災担当者がジケイスペースに相談し見直しを行っている。 ・非常食や防災グッズを点検し見直しを行った。	・現在の教室レイアウトの安全性は検証されているのか。 ・教室や設備の利用状況に関する意見交換や学生支援の検討からも、安全・安心な学習環境の整備に対する意識が感じられる。今後、災害時の対応マニュアルや避難訓練の実施体制などをさらに充実させることで、より強固で実効性のある防災体制へと発展していくことが期待される。
7 学生の募集と受け入れ	7-1 学生募集活動は、適正に行われているか	3	東京都専修学校各種学校連合会の定めたルールに基づいた募集開始時期、募集内容（AO 入学等も）を毎年、遵守している。	・募集ルールの遵守及び誇大広告の排除など充分に配慮し実施している。 ・令和8年度も入学定員を満たすことが出来た。	・学生数の増加が見られることから、募集活動は適正かつ効果的に行われていると考えられる。魅力ある教育環境が着実に伝わっている成果であり、今後も継続的な改善と情報発信が期待される。
	7-2 学生募集活動において、教育成果は正確に伝えられているか	3	パンフレット、入学案内、ダイレクトメール、体験授業、学校説明会、ホームページ、SNS等を通して教育内容や教育成果を正しく伝えるように、広報担当者、教員、キャリアセンターの教職員がチェックする体制を構築している。	・入学後や仕事のイメージを明確にしてもらうために、体験入学や学校説明会への複数参加を促し、職業理解と学校選びが充分に検討できるようにしている。 ・成長過程がわかるように、一般的な学生の入学時から1年後、2年後、3年後、卒業時の作品を使って学科説明している。	・学生が教育に高い関心と期待を寄せていることから、教育成果は十分に伝わっていると受け取れる。より一層の可視化と広報活動により、今後さらに魅力が伝わることが期待される。
	7-3 入学選考は、適正かつ公平な基準に基づき行われているか	3	・出願方法、必要書類、出願受付日、選考日などについては、学生募集要項に明示し実施している。 ・選考は面接試験と書類（入学願書、AOエントリーシート、高校調査書など）で行い、面接担当者、事務局長のチェックのうえ合否の判定を行っている。 ・留学生に関しては上記に加えて、日本語能力を確認するテストを実施している。	・面接担当者は入学願書またはAOエントリーシートに記入された作文をもとに質問を行っている。 ・選考基準は面接と書類で「将来の夢」や「目的意識」の確認を行い合否判定している。 ・留学生の日本語テストは日本語能力試験2級レベルの内容で80点を合格としている。 ・学力検査は行っていないが、学習能力チェックテストを導入して、学習能力を事前に把握できるようにしている。しかし、いわゆる学力不足の学生のための指導体制は十分ではない。	・受け入れ基準の緩和については理解できるが、入学後の進級においては基礎学力テストを実行し、基準に満たない場合は留年、別途指導といった体制つくりが必要に思う。 ・入学後における留学生への語学サポート、日本人学生への英語教育の拡充を希望する。 ・語学レベルでN2を持っていても、ほぼコミュニケーションに問題のある留学生が存在する。
	7-4 学納金は妥当なものとなっているか	3	学納金は授業料、施設設備など学内の機材や環境、教科書及び教材、学校行事、資格検定などにかかる費用を算出し、滋慶学園本部の了承のもと決定している。	・在学中の授業料及び諸経費などの学納金については学生募集要項に明記している。 ・定員通りに入学しており、学納金は妥当なものだと思われる。	・学納金に対して大きな問題提起は見られず、全体として妥当性が保たれていると考えられる。一方で、経済的に困難な学生にも配慮した支援体制をさらに拡充することで、教育の公平性がより高まると期待される。
8 財務	8-1 中長期的に学校の財務基盤は安定しているといえるか	3	毎年、次年度（短期的）と5か年（中長期的）の2つの視点で事業計画を作成し収支予算も立てており、財務基盤を安定させる体制が構築されている。	・短期的な予算編成は当年度の実績を基に次年度に予定している計画を加味して行っている。 ・中長期的な予算編成は主として将来の計画を視野に入れた上で、業界の情勢を読み取りながら行っている。	・日常の運営が安定的に行われており、財務基盤も一定の安定性を保っていると見受けられる。さらに柔軟な財務運用ができるようになることで、将来的な展望にもより強みが発揮されるだろう。
	8-2 予算・収支計画は有効かつ妥当なものとなっているか	3	健全な学校運営のため、在校生数、広報及び就職計画を鑑みながら収支計画を作成し、それを学校、学園本部、理事会、評議員会と複数の目でチェックしており実行している。	・短期的な予算に関しては現実のものと乖離した場合は修正予算を組み、中長期的な予算においては毎年編成し直している。 ・学校法人コミュニケーションアートの理事会は9名の役員（理事7名、監事2名）、評議員会は15名で組織されている。	・限られた予算の中でも、学生支援や設備整備への工夫が見られ、計画はおおむね有効に機能している。今後のニーズを反映した予算配分によって、さらなる教育環境の充実が期待される。
	8-3 財務について会計監査が適正に行われているか	3	会計監査は、法人及び学校の利害関係者に対して、法人等の正確かつ信頼できる情報を提供するために、第三者による監査人が法人とは独立し計算書類が適切かどうかを監査している。	四半期ごとに予算実績対比を出し、学校責任者が予算と実績が乖離しているようであれば修正予算を編成し、理事会、評議員会の承認を得ている。	・全体の運営が健全に進んでいることから、監査体制も適切に機能していると推察される。今後も透明性の維持が期待される。
	8-4 財務情報公開の体制整備はできているか	3	「財務情報公開規程」及び情報公開マニュアルを作成し財務情報公開の体制を整えており、毎年公式HPで公開している。	作成した決算書、事業報告書については、情報公開の対象となり公式HPで閲覧出来る。	情報開示の重要性が増す中で、体制整備の更なる推進が期待される。関係者への信頼性向上にもつながるだろう。

9 法令等の遵守	9-1 法令、設置基準等の遵守と適正な運営がなされているか	3	・滋慶学園グループ全体の方針として法令遵守を掲げ、その方針を理解し実行に努めている。 ・法人理事会のもとに、コンプライアンス委員会で学校運営が適切かどうかを判断している。	・コンプライアンス委員会は委員長（滋慶学園グループ）と委員2名（TECH.C.）で構成している。	制度上の運営は適正に行われており、法令等に沿った体制が整っている。今後も継続的な見直しと改善により、さらに質の高い教育運営が行われると期待される。
	9-2 個人情報に関し、その保護のための対策がとられているか	3	個人情報保護に関しては、教職員は一般社団法人日本プライバシー認証機構（JPAC）主催の研修を受け、個人情報取扱従事者資格を取得している。	個人情報管理のための組織体制をグループ内に設け、個人情報管理システムを構築し対応にあたっている。	教育現場での慎重な対応がうかがえる。今後の体制強化によって、より安心できる環境が整えられることが期待される。
	9-3 自己点検・自己評価の実施と問題点の改善に努めているか	3	学校関係者評価委員会を開催し、自己点検、自己評価をもとに様々な意見を伺う体制を構築している。	・学校関係者評価委員会の委員は業界関係者、卒業生、近隣の方、高等学校関係者、保護者で組織されている。 ・委員から出た意見をもとに改善に取り組んでいる。	PC貸出や教室開放に関する改善の議論など、日常的に自己評価と問題点の抽出が行われている様子がうかがえる。こうした改善意識が、今後のより良い教育環境の実現につながることが期待される。
	9-4 自己点検・自己評価結果を公開しているか	3	学校の公式HPに情報公開しており、自由に閲覧することができる。	HPの情報公開は年に1回更新している。	自己点検の取り組みがなされていることから、今後はその成果を積極的に発信する体制の整備が期待される。
10 社会貢献	10-1 学校の教育資源や施設を活用した社会貢献を行っているか	3	学校の施設設備を使った職業理解のための体験授業や、講師による出張授業など充分な体制が整っている。	中学校の修学旅行や学校見学の受け入れ、高等学校へ出向いて職業理解のための体験授業や部活動支援、海外の大学や専門学校からの施設見学などの問い合わせが増えている。アメリカから短期留学を12名受け入れ、アニメ、イラストの授業を8日間受講した。	学校は教育資源を最大限に活用し、学生の学びやすさを支える体制づくりを進めている。これらの活動は地域や社会への波及効果もあり、今後さらに明確な形での社会貢献が進められることが期待される。
	10-2 学生のボランティア活動を奨励、支援しているか	3	ボランティア活動は積極的に奨励している。	・年度末に学生有志による近隣の清掃活動を行っている。 ・学園祭では学校を開放し、高等学校、日本語学校、保護者、学生の友人、地域の皆さんなど約500名に来場していただいた。	学生の自主性を重視する姿勢が全体から感じられ、今後はボランティア活動への奨励・支援がさらに発展していくことが期待される。